

現代朝鮮語の副詞化‘-게’と‘-이’類について

中西恭子

1.はじめに

(1-a)、(1-b)のような文は、意味論的になんら違いはないと説明されることが多い¹⁾。しかし、(2)の例にみるように、‘-게’と‘-이’類²⁾の置き換えが常可能なわけではない。

(1-a) 영이가 집안을 깨끗하게 청소했다³⁾. (ヨンイは家の中をきれいに掃除した)

(1-b) 영이가 집안을 깨끗이 청소했다. (同)

(2-a) *영이가 멀게 떠났다.

(2-b) 영이가 멀리 떠났다. (ヨンイは遠く旅立った)

本稿では、(1-a)と(1-b)が本当にまったく同じ意味なのか、異なるとすればどのように異なるのかという問題意識から出発し、副詞形語尾‘-게’といわゆる「副詞派生接尾辞」‘-이’類の意味機能を明らかにすることを一義的な目的とするが、それに先立ち‘-이’類をめぐる若干の問題についても検討してみたいと思う。

次章ではまず、‘-이’類のうち‘-이’と‘-히’の出現環境の違いについてみる⁴⁾。3章では‘-게’と‘-이’類の形態論的・統辞論的關係を概観し、4章で両者の意味論的な違いについて考察することにする。

2. ‘-이’와 ‘-히’의出現環境

まずは(1)で、하다形容詞‘깨끗하다’の‘-이’類による副詞形が“*깨끗히”ではなく‘깨끗이’であることから、손남익(1995)の副詞目録1500語をWEB版標準国語大辞典と照合して‘-이’と‘-히’の使い分けについて調べてみた。その結果、必ず‘-이’と結合するのは以下の3グループであった。

- (a) 하다形容詞以外の形容詞の語幹から派生したもの
- (b) 하다用言の語根とはならない名詞から派生したもの
- (c) 副詞(擬音擬態語も含む)から派生したもの

(3)は(a)の例、(4)は(b)の例、(5)は(c)の例である。用言由来でない(b)、(c)は‘-게’による副詞形をもたないため、使い分けが問題になることはない。

- (3) 가벼이(軽く←가볍다), 가뻘(息苦しく←가쁘다), 가소로이(可笑しく←가소롭다)⁵⁾, 고이(きれいに←곱다), 굳이(敢えて←굳다), 길이(長く←길다), 깊이(深く←깊다), 높이(高く←높다)…

- (4) 간간[間間]이, 개개[個個]이, 곳곳이(所々に), 날날이(個々に), 뭉뭉이(一人分ずつ), 방방[房房]이, 쌍쌍[雙雙]이, 앞앞이(一人一人), 집집이(家々に), 쪽쪽이(切れ切れに), 촌촌[村村]이, 켜켜이(幾重に)…

- (5) 가다가다가(幾筋にも), 감냥감냥이(各々自分なりに), 뻥긋이(にっこりと), 사뭇이(軽やかに), 상긋이(にこっと), 생긋이(にこっと), 성긋이(にこっと)⁶⁾, 솜솜이(ぶつぶつと), 일찍이(先に), 히죽이(にやっと)…

一方、하다形容詞の多くは‘-히’により副詞化される⁷⁾。

- (6) 가득히(いっぱい)←가득하다, 간결히(簡潔)←간결하다, 날씬히(ほっそりと)←날씬하다, 단단히(しっかりと)←단단하다, 대단히(とても)←대단하다, 막연히(漠然と)←막연하다, 부산히(せわしく)←부산하다, 비참히(悲慘に)←비참하다, 상당히(相当に)←상당하다, 안녕히(安寧に)←안녕하다)…

ただし김형배(2014, 133)にも指摘があるように、語根末が入の場合には音韻論的理由⁸⁾からㅁが脱落し‘-이’となる。今回の照合結果も、それを裏付けるものであった。語根末に入をもつ하다形容詞には、例外なく‘-히’ではなく‘-이’が結合していた。

- (7) 가볍히(軽やかに)←가볍하다, 기울히(傾いて)←가울하다, 꺾이지(屈せず)←꺾지하다, 남짓히(～余り)←남짓하다, 낯낯히(しなやかに)←낯낯하다, 따듯히(暖かく)←따뜻하다, 몽긔히(傾いて)←몽긔하다, 바듯히(きちきちに)←바듯하다, 반듯히(まっすぐに)←반듯하다, 빙긔히(にっこり)←빙긔하다)
…

同様の現象は語根末にㅍをもつ固有語の하다形容詞でもみられるが、語根末にㅍをもつ固有語の하다形容詞が‘-히’と結合した例も、例外とするにはあまりに多い。(8)がその目録である。

- (8) 가득히(いっぱい), 가마득히(はるかに), 가마아득히(はるかに), 갈썩히(とろりと), 가뜩히(けなげに), 거룩히(神々しく), 결곡히(端正に), 공칙히(運悪く), 그득히(なみなみと), 그악히(あくどく), 낙낙히(ゆったりと), 넉넉히⁹⁾(十分に), 녹녹히(やわらかく), 눅눅히(湿っぽく), 뚝뚝히(はっきりと), 맥맥히(息苦しく), 멉멉히(耳をつんざくように), 빼곡히¹⁰⁾(ぎっしりいっぱい), 빨그죽죽히(くすんだ赤色に), 아득히(はるかに), 아뜩히(気が遠くなって), 어득히(はるかに), 여낙낙히(柔和に), 익숙히(巧みに), 익히(익숙히の縮約形、よく), 자욱히(もやもやと、‘-이’も可), 착히(善良に),

촉촉히(しっとり、‘이’も可), 탐탁히(好ましく), 툭툭히(たっぷりと), 하야말썩히(こざっぱりと)

語根が漢字語の場合は、語根末がㅏであってもすべて‘-히’で現れる。

(9) 간곡[懇曲]히, 고독[孤獨]히, 과묵[寡默]히, 급박[急迫]히, 명백[明白]히, 민속[敏速]히, 신속[迅速]히…

したがって「語根末がㅏの固有語が‘-이’と結合する」とは言い切れないものの、その逆、つまり「語根末がㅏでも漢字語は‘-이’ではなく‘-히’と結合する」ということは言えそうだ。語根末に入をもつ하다形容詞がすべて固有語であることを思えば、漢字語の하다形容詞が‘-이’類と結合する際、その形態はすべて(‘-이’ではなく)‘-히’であると言えよう。(10)に挙げたように、語根末がㅏやㅑ以外の하다形容詞にもわずかながら‘-이’と結合するものがあり、うち원원이는漢字語であるが、원원히という形態もあるため、これも例外とはならない¹¹⁾。

(10) 갈썩이(細長い), 길썩이(長めに), 백적지근이¹²⁾(ずきずきと), 아스라이(はるかに), 원원[源源]이(源深く)

逆に、하다形容詞でないにもかかわらず‘-히’と結合するものがある。これらの語根はすべて漢字語である。(11)は김형배(2004)に挙げられたものであるが、今回の調査で(12)のような例も確認された。

(11) 열심[熱心]히, 감[敢]히, 공[共]히, 기연[期然]히, 필[必]히

(12) 속속[速速]히¹³⁾(素早く), 언감[焉敢]히(焉んぞ), 정[正]히(正に), 종속[從速]히(速やかに), 특[特]히

‘열심히’の初出は“성교절요<聖教切要>”(1882)であり、現在でも‘열심한 사람’のような形態はキリスト教信仰と関連した文脈に限られている。‘정히’(1703, “三譯總解”), ‘속속히’(1796, “敬信錄諺解”), ‘중속히’(1904, “大韓毎日申報”), ‘언감히’(1923, “演經坐談”)なども出現は比較的新しく、語根が漢字語であるため하다形容詞を形成し得るとの誤解に基づく語形成と考えられる。

‘감히’と‘특히’はそれぞれ‘감연[敢然]히’と‘특별[特別]히’の縮約形であり‘감연하다’, ‘특별하다’が하다形容詞であることから、また‘공[共]히’の場合、同音異義語の‘공[空]하다’の存在が影響を及ぼした可能性がある。기연히, 필히については初出が明らかでないが、いずれも翻訳調の語であり、これらもまた漢字語の하다形容詞が通常히によって副詞化することからの類推による語形成であろう。ここまでみてきたことを表にまとめると次のようになる。

<表1> ‘-이’類における‘-이’と‘-히’の使い分け

	漢字語	固有語
하다形容詞	‘-히’	‘-히’ 語根末が入の場合は‘-이’ 語根末がㄷの場合は‘-이’となる傾向
하다形容詞以外	‘-이’ 例外的に‘-히’	‘-이’

3. ‘-게’と‘-이’類の形態論的・統辞論的關係

‘-게’と‘-이’類の形態論的特徴としては、前者がほぼすべての用言に付いて副詞形を形成することができるのに対し、後者には大きな制約がある。動詞、形容詞、存在詞、指定詞から一例を挙げると次のようになる。

<表2> ‘-게’, ‘-이’類との用言別結合可否

	가다(動詞)	예쁘다(形容詞)	存在詞	指定詞
-게	가게	예쁘게	있게/ 없게/ 계시게	*이게/ 아니게
-이類	*가이	*예뻐/ *예쁘이	*있이/ 없이/ *계시이	*이이/ *아니이

現代朝鮮語では、動詞に‘-이’類がついて副詞になることはない。存在詞はすべて‘-게’との結合は可能だが、‘-이’類と結合するのは‘없다’のみである。指定詞については、‘아니다’が‘본의 아니게’, ‘~아니게 하다’のようにごく限られた形で‘-게’と結合するのみ、副詞形をとること自体がほとんどない。形容詞は形態論的にはすべて‘-게’との結合が可能であるのに対し、‘-이’類との結合は制限的である。

例えば바쁘다, 가쁘다からはそれぞれ바빠, 가빠という副詞が派生しているのに対し、表2でみたように、예쁘다には*예빠または*예쁘이という派生語はない。註7で言及した漢字1字を語根とする하다形容詞でも、‘-이’類、すなわちと‘-히’と結合するのは능[能]히, 심[甚]히, 편[便]히, 친[親]히など少数派である。

このような‘-게’と‘-이’類の統辞論的機能については、前者を副詞形語尾、後者を派生接辞¹⁴⁾とする見解が伝統的に主流を占めてきた¹⁵⁾。それによると(1)は次のように分析される。

(1-a) 영이가 [집안을 깨끗하]게 청소했다.

(1-b) 영이가 집안을 [깨끗이 청소하]였다.

(1-a)は‘영이가 청소했다’という主文に‘집안이 깨끗하-’という文が内包され、語尾‘-게’が副詞句を構成している複文である。それに対し、(1-b)の‘깨끗이’は述語‘청소하-’を修飾する副詞で、文としては単文である。

任洪彬(1976)、沈在其(1982)もこのような区分に基づき、両者の違いを、主文と内包文の行動主を別の個体に切り離せるか否かという「分離性」の概念で説明した。任洪彬(1976)は、例えば(13)のような文でb.が成立しない理由を、‘솔직하게’が直接的な対象を欠き、‘-게’が本来もつべき分離性の原則に反するためだとしている。

(13) { a.솔직히, b.*솔직하게 }, 그는 거짓말장이다. (正直、彼は嘘つきだ)

沈在其(1982)は(14)のような例を引いて、b.のときは[+分離性]が実現するが、a.では[-分離性]となり意味上の不調和が生じると説明している。同論文(426)によると‘-게’は統辞的に「分離性」を有し、それにより内包文は意味上、主文の述語にとって「予定状態化」するという。

(14) 영화가 그 장면을 { a.*슬피, b.슬프게 } 묘사하였다.

(ヨンヒはその場面を物悲しく描写した)

これに対し宋喆儀(1992)は(1-a)、(1-b)のような対が存在する以上、‘-게’と‘-이’類の使い分けは「分離性」とは無関係だとし、そのような統辞論的な違いよりも‘-이’が派生接尾辞であるという点を重視、文の成否を分けるのはその派生副詞が後続動詞と文脈上整合的かどうかであるとした。このような主張は、例えば(15)のようなケースでは極めて有効である。(15)で語根‘굳-’は、‘-게’との結合ではその意味を維持する一方、‘-이’類との結合では意味が変じ、その結果、(15-a)と(15-b)では意味がまったく異なってくる。

(15-a) 영이가 굳게 맹세했다. (ヨンイは固く誓った)

(15-b) 영이가 굳이 맹세했다. (ヨンイは敢えて誓った)

しかし‘-이’類との結合によって意味が変じる語のなかには、(16)にみるように、語根の意味自体は維持されているものもある。にもかかわらず‘-게’の場合と意味的な違いが生じるのはなぜか。

(16-a) 영이가 밥을 적게 먹었다. (ヨンイはごはんを少し<少なめに>食べた)

(16-b) 영이가 밥을 적이 먹었다. (ヨンイはごはんを少しばかり食べた)

ここで「分離性」の有無が問題でないことは言うまでもないが、同時に、‘-이’類との結合による意味変化というだけでは説明しきれない部分が残るのも確か

である。

一方、宋喆儀(1992, 262)は、‘-이’類と‘-게’の文修飾機能についても言及している。前者にそれが認められる反面、後者にはそれがない。‘-게’が文を修飾するためには通常‘-게도’とならなければならない、‘다행하게도, 인명 피해는 없었다’(幸いにも人命の被害はなかった)のような文が成立するのは、‘도’が‘게’副詞形に付加されている統辞的条件を緩和するためだとした。

このような説明に対しては、‘손스럽게 왜 그래? (なんだよ、ダサイなあ)’, ‘그러지 마, 구질구질하게. (やめろよ、未練たらしく)’のような反例を挙げることも可能で、これは‘-게’による‘-이’類の意味領域への拡張とみることができるかもしれない。それはともかく、‘-이’類の統辞論的機能を述語修飾ではなく文修飾とする見解は、(1)のような対の異同を解明する手がかりを与えてくれる。

さらに박소영(2001)は、(先行用言が動詞の場合も含め) ‘-게’を「結果副詞形」とし、「VP中の動詞の項。意味域として目標域をもつ」とした¹⁶⁾。これは、‘-게’を小節構成の補文子とする従来の見方に修正を加えるものとして注目される。

4. ‘-게’と‘-이’類の意味論的相違

上掲の任洪彬(1976)、沈在其(1982)は、‘-이’類と‘-게’の違いを意味論的に探った初期の研究でもある。任洪彬(1976)は‘-이’類を[-対象化]、‘-게’を[+対象化]とし、沈在其(1982)は前者を[-対称性]、後者を[+対称性]とした。これらはいずれも「分離性」という統辞論的分析に基づいている点で共通しており、それが宋喆儀(1992)によって否定されたことはすでに述べた。その宋喆儀(1992)は‘-이’類が派生接尾辞であるという点を重視し、それによって生じる意味の違いが後続動詞と文脈上整合的かどうかの違いであるとしたが、(1)のような対の文が具体的にどう違うかについては言及がない。

その後임채훈(2007)は、文における‘-게’の意味構成として主語志向副詞と「方式副詞」の別を挙げた。「方式副詞」とはmanner adverbのことであるが、対象項が文全体のできごとか、そのできごとを構成する「個体」かによって‘-게’

の機能を二分したものである。同論文のテーマは‘-게’に限定されており‘-이’類との比較については述べられていないが、“그녀가 무례하게 그 교수의 말에 답했다.”(彼女は {a.無礼に / b.無礼にも} その教授の言葉に答えた) のような例文の提示は、‘-이’類との関係を考える上でも有用である¹⁷⁾。

また장영준(2009)は、‘-이/히’は話者ができごとを眺める見方を表す機能を持ち、‘-게’は主語や目的語の属性を記述する述語の機能を担うとして、次のような分類を行っている。

- ①語彙的副詞形が多く用いられるケース
- ②統辞的副詞形が多く用いられるケース
- ③同じ頻度で出現するケース

そして①に該当する形容詞は、「文や節の表すできごとや事態を項としてもつ副詞として、またはできごとに対する話者の態度を表現する副詞としての機能に適合」しており、②に該当する「形容詞派生副詞は、主語や目的語を項とする二次述語としての機能に適合している」とした。さらに「色彩や味のように本質的に(主語や目的語などの)名詞を項とする形容詞」が「語彙的副詞として用いられず統辞的副詞」としてのみ用いられるのもそのためだとする。

本稿では、‘-이’類を「できごとに対する話者の態度を表現する副詞」とした장영준(2009)の見解に同意しつつも、‘-게’は基本的に述語修飾の成分副詞であり、では(1)のような対はどのように解するのが適当か、という視点に立って論を進めていくことにする。

あらためて(1)を(17)のような例と比較してみる。

(1-a) 영이가 집안을 깨끗하게 청소했다.

(1-b) 영이가 집안을 깨끗이 청소했다.

(17-a) 영이가 옷을 지저분하게 입었다. (ヨンイは服をだらしなく着了)

(17-b)^{??} 영이가 옷을 지저분히 입었다. (??ヨニイは服をだらしくも着た)

従来の統辞論的議論に沿って言うなら、(1-a)は‘방이 깨끗하다’、(17-a)は‘옷이 지저분하다’と解される。前者はできごとの結果として問題なく成立するが、後者は「服がだらしない」わけではない。「だらしない」のは‘입.’の有り様、つまり着方である。

一方、次のような文なら‘지저분히’も問題なく成立する。

(18-a) 방안에 옷가지들이 지저분하게 널려 있다.

(部屋に服が見苦しく散らばっている)

(18-b) 방안에 옷가지들이 지저분히 널려 있다. (同)

ここでも‘옷가지들이 지저분하다’でないことは言うまでもない。つまり(17-b)も(18-b)も‘지저분히’が修飾しているのは、それぞれ‘영이가 옷을 입었다’、‘방안에 옷가지들이 널려 있다’というできごとだということがわかる。それぞれのできごとを話者が‘지저분하.’と判断しているのである。(17-b)が不自然なのは영이가服を着ること自体なら‘지저분하.’ではないからだ。それに対し、(18-b)の‘방안에 옷가지들이 널려 있다’というできごとは、それ自体‘지저분하.’という判断の対象となる。‘-이’類による副詞化を述語修飾とみる伝統的な統辞論的解釈とは異なり、それはむしろ文全体を修飾するものと解したほうが適切であろう。

さらにわかりやすい例を挙げるなら次のようなものがある。

(19) 영이는 { a.*행복히, b.행복하게 } 죽었다.

(ヨニイは幸せに死んだ <幸せな死に方をした>)

(20) 영이는 { a.다행히, b.*다행하게 } 안 죽었다.

(ヨニイは幸いにも死ななかつた)

(19)のできごとは‘영이는 죽었다’である。そのこと自体は決して‘행복하-’ではあり得ないが、‘죽-’の有り様を‘행복하-’とみなすことは可能である¹⁸⁾。逆に(20)の‘영이는 안 죽었다’というできごとは、それ自体を‘다행하-’と評することはできても、‘다행하-’という有り様で死ぬ(ことの否定)というのは概念として成立しがたい¹⁹⁾。‘다행하게’は‘도’を補って‘다행하게도’とすることで、つまり文修飾にすることで正文となる。それに対し‘다행히’はもともと(20)の文中で成り立っているわけで、それが文修飾として機能していることは自明である。

このように考えれば前掲(14)で‘슬프-’は‘묘사하-’の有り様を言っているのであって、‘영희가 그 장면을 묘사하였다’というできごとと自体なら‘슬프-’ではない。この文脈で‘슬피’が成り立たないのはそのためである。

もうひとつ、コーパス(이상, “중생기”)から典型的な用例を引いておく。

- (21) 너무 금칠을 아니했다가는 { a.서툴리, b.*서툴게 } 들킬 염려가 있다.
(あまりに鍍金がいい加減だと、迂闊にバレる恐れがある)

‘서툴게 들키-’(迂闊なようにバレる)という概念自体、通常は成り立たない。‘너무 금칠을 아니했다가(는) 들키-’というできごとを指して、話者が‘서툴-’と評価しているのである。

ここまでの議論を要約すると、暫定的に(22)のことが言える。

- (22) ‘-이’類はできごとと全体に対する話者の評価を表す文修飾副詞
‘-게’は結果、様態、程度などを表す述語修飾副詞

しかし、次のようなケースはどうか²⁰⁾。

- (23) 영이가 밥을 { a.많이, b.?? 많게 } 먹었다.
(ヨンイはごはんをたくさん食べた)

‘-게’が‘-먹-’の「程度」を表すものであるなら、(23)はa, b.ともに成立しなければならない。しかしこのような文で‘-게’は通常用いられない。ところが、(23)に‘평소보다’(平素より)を付加すれば、a, b.ともに成立する。‘영이가 밥을 먹었다’というできごとを、客観的に「たくさん」、すなわち‘많이’と評することが常に可能である反面、「多く食べた」と言うためには何かと比較するなど何らかの状況設定が必要ということであろう。「平素より多く」と言う時の‘많게’には主体の意図的な裁量が含まれる。

‘-게’の選択に「主体の意図・裁量」が関与していることは、次のような例からもわかる。

(24) 시험 날짜가 { a.가까이, b.^{??}가깝게 } 다가왔다²¹⁾.

(試験の日が近づいてきた)

(25) 영이가 나에게 { a.가까이, b.가깝게 } 다가왔다.

(ヨンイが私に近づいてきた)

(24)の主体は無情物、(25)の主体は有情物である。つまり、主体に意図・裁量の働く余地がない場合、‘-게’は不可能ではないまでも許容されにくいと言えよう。

一方で‘-이’類は、主体の意図・裁量とは無関係に、話者ができごと全体に対し判断を下すものである。このように考えれば、色や味、匂いといった形容詞が‘-이’類と結合しないという宋喆儀(1992, 244)や장영준(2009, 110)の指摘も無理なく説明できる。色や味、匂いといった視覚的、感覚的な形容はできごと自体に対する他者の評価には馴染まず、主体の意図・裁量によるものだからである。

(26) 영이는 벽을 { a.*하얗이, b.하얗게 } 칠했다. (ヨンイは壁を白く塗った)

(27) 영이는 음식을 항상 { a.*짜이, b.짜게 } 먹는다.

(ヨンイは食べ物をいつも辛く食べる <辛い味付けを好む>)

ところで、形態論的には可能でも実際には‘-게’と結合しない形容詞がいくつか存在する。前章で‘-게’が「ほほすべての用言に付いて副詞形を形成」としたのもこのためである。

(28) 영이는 { a.천천이, b.*천천하게 } 밥을 먹었다.

(ヨンイはゆっくりご飯を食べた)

(29) 영이는 { a.가만히, b.*가만하게 } 앉아 있었다.

(ヨンイは黙って座っていた)

食べる速度を「主体の意図・裁量」と考えれば(28)でbが成立してもよさそうなものだが、この文例に限らず‘천천하게’という形態はほとんど用いられない。(29)の‘가만하게’についても同様である。それに対し(29)と同様の状態を表す(30)では、‘조용히’, ‘조용하게’のいずれもが成り立つ。両者の許容度の違いについては、‘가만하-’と‘조용하-’のより高度な意味資質の違いに原因をさぐるほかなさそうだ²²⁾。

(30) 영이는 { a.조용히, b.조용하게 } 앉아 있었다.

(ヨンイは静かに座っていた)

このように形態論的には存在しても実際には用いられない‘-게’形の存在が‘-게’と‘-이’類の問題をいっそう複雑にはしているが、少なくとも‘-게’と‘-이’類がいずれも成り立つ(1)のようなケース²³⁾については、次のようにまとめることができる。

‘-이’類はできごと全体に対する話者の評価を表す文修飾副詞で、主体の意図・裁量とは無関係。

‘-게’は結果、様態、程度を表す述語修飾副詞で、主体の意図・裁量が反映され得る。

5.まとめ

15世紀の派生接辞を扱った구본관(1998)によると、中期朝鮮語にあって‘-이’はかなり高い生産性をもっており、句を構成することも少なくなかった。逆に‘-게’を通時的に考察した방영심(2008)からは、中期語にあってはほとんど生産性をもたなかった‘-게’が、時代が下るにつれその機能を拡張してきたことがわかる。とはいえ、‘-이’類の語尾的機能は現代語にあっても完全に消滅したわけではない。副詞化の‘-이’類は次のように大別される。

(a)語尾として句を構成する²⁴⁾

(b)派生接尾辞

①語根が新たな意味を獲得²⁵⁾

②語としては新たな意味を獲得しているが、語根はもとの意味を保ったまま

(b)の①は副詞として確立しており、‘-게’とは意味機能自体が異なるため両者の異同が問題になることはない。意味的重複で問題となるのは(b)の②の場合であり、本稿ではこの点を中心にみてきた。その結果、‘-게’と重複した意味機能を示す‘-이’類が構文的には文修飾²⁶⁾であり、意味機能的にはできごと全体に対する静的な話者の評価を表すことがわかった。それに対し‘-게’は後続動詞の有り様を表す述語修飾副詞で、変化の結果・(相対的な)程度を表す動的な描写である。‘-게’には主体の意図・裁量が反映され得る。

このような結論に基づき、(1-a)と(1-b)の違いを図示すると次のようになる。

영이가방に働きかけて(→)、点線の囲みの中で起こる一連の推移を영이가動的に捉えたものが‘깨끗하게’(図1)で、この一連のできごとを話者が、場の外から静的に評価(-→)したものが‘깨끗이’(図2)である²⁷⁾。

図1

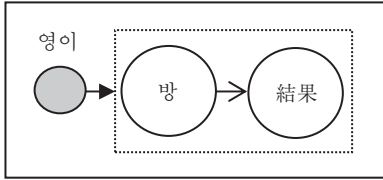
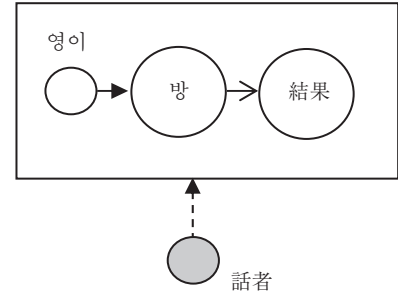


図2



註

- 1) ‘깨끗이’와 ‘깨끗하게’는 의미 차이가 없습니다. 다만 ‘깨끗이’는 부사이고 ‘깨끗하게’는 형용사입니다. (‘깨끗이’と‘깨끗하게’に意味の違いはありません。ただ、‘깨끗이’は副詞で‘깨끗하게’は形容詞です。<韓国・国立国語院SNSより>)
- 2) ‘-히’, ‘-리’, ‘-기’, ‘-니’なども含め、本稿では‘-이’類と総称する。
- 3) 宋喆儀(1992)より引用。以下、出典を記していない文例はすべて作例。
- 4) ‘-리’, ‘-기’, ‘-니’などについても個別に検討する必要があるが、基本的に‘-이’の異形態とみて本稿では立ち入らない。(例えば‘멀리’は‘멀-+이→머리’に‘ㄹ’が挿入されたもの、‘살짜기’は‘살짝+이’)。それに対し‘-히’は同じ語根が‘-이’と結合することもあるため、‘-이’類に含めつつも単に‘-이’の異形態とみなすことはできない。구분관(1998, 317)ではこれらを一種의 쌍형어(双形語)だとしている。
- 5) ‘-롭다’類はすべてここに含まれる。
- 6) ほかに쌍긋이, 쌍긋이, 쌍긋이, 쌍긋이, 쌍긋이, 쌍긋이など。
- 7) 강[強]하다, 궁[窮]하다, 독[毒]하다, 둔[鈍]하다, 순[順]하다, 약[弱]하다, 후[厚]하다など漢字1文字を語根とするものには、‘-이’類による副詞形自体をもたないものが多い。
- 8) 김형배(2014)はその「音韻論的理由」を、ハは語根末で/ㄹ/なのでヒと結合すると[치]になる、このような複雑な音韻変化を回避するため、と説明しているが、語根と接辞の間でハ→ㄹ/は起らない。それよりハとㄱの音韻的同質性(中西<2014>)に理由を求めべきであろう。以下にみるㄷ(喉音)についても同様。

- 9) 中期語では넉넉이とも。
- 10) 『朝鮮語辞典』(小学館、1993)では뉘곡이。
- 11) 名詞원원から副詞원원いと、形容詞원원하다から원원히が別途、派生したものと考えられる。
- 12) 뻑적지근히も可。
- 13) 속속이は속속들이で意味が異なる。
- 14) 송철의(1992)では接尾と屈折の違いを次のように定義している。
- ① 新たな単語（あるいは語幹）を形成することができるか否か。
 - ② 派生接辞は語基の統辞範疇を変えることができるが、屈折はできない。
 - ③ 派生のパラダイムでは空欄が多く現れるが、屈折は現れない。
 - ④ 派生接辞は屈折語尾より語基に近く位置する。
 - ⑤ 派生接辞は語基に語彙的意味を付加するが、屈折語尾はそうではない。
 - ⑥ 派生接辞は意味が一定だが、屈折語尾はそうでない場合もある。
 - ⑦ 派生接辞の意味は規則的に予測されるが、屈折語尾はそうでない傾向がある。
 - ⑧ 派生接辞では語幹の意味が極めて制約されるが、屈折語尾はそうではない。
 - ⑨ 派生接辞は語彙孤島制約(lexical island constraint)を受けるが、屈折語尾はそうではない。
 - ⑩ 派生語は独自に単語として語基とは無関係に統辞的な意味変化や形態変化を経ることがあるが、屈折形でそのようなことはまれだ。
- 15) 최현배(1928)は‘-게’を「屈折形態素」、‘-이’を「派生形態素」と呼んだ。以来、多くの研究でこの区分が踏襲されてきている。
- 16) 同論文は、존은 깡통을(*바람을/*태양을) 눌렀다. 존은 깡통을 납작하게(*날카롭게/*노랑게) 눌렀다.のような例で‘깡통을’も‘납작하게’も‘누르-’による選択制約を受けていることから、‘-게’を述語の項とみるべきことを示した。
- 17) ここで부레하게を부레히に置き換えるなら、日本語訳はb.に特定される。
- 18) “영이는 {행복히, 행복하게} 살았다”では‘-이’類も‘-게’も、いずれも可。
- 19) 否定要素の影響を避けるため‘안 죽었다’を‘목숨을 건졌다’に置き換えても同じことが言える。
- 20) ‘적다’の場合についてはすでに(16)でみた。
- 21) ここでb.を可とするネイティブもいたが、そこには擬人化の意識が働いているものと思われる。また‘올해도’が付加されれば‘가깝게’も問題なく成立するとの意見も聞かれたが、これは(23)の‘맑게’に似た、何かとの比較で相対化された意識の結果かもしれない。
- 22) ‘조용해지다’は存在するが‘가만해지다’は存在しないなど、両者には程度における変化・裁量の余地という点で違いが認められる。
- 23) ほかに{|가벼이, 가볍게|, |강력히, 강력하게|, |게울리, 게으르게|, |깊이, 깊게|, |따뜻이, 따뜻하게|, |묵묵히, 묵묵하게|, |부지런히, 부지런하게|, |성실히, 성실하게|, |착실히, 착실하게|,

- {친절히, 친절하게}, {확실히, 확실하게}など。
- 24) 現代語にあっても“그 사람은 [말 한 마디 없]이 떠났다.”, “우리는 [친구 하나 없]이 못 산다.”のように‘이’類には語尾の機能が認められる。‘같이’, ‘듯이’では“[어른들이 하는 것과 같]이 따라 해봤다.”, “[비가 오는 듯]이 물이 쏟아졌다.”のように、むしろ‘이’が句を構成するのが一般的である。
- 25) ‘더욱이’のように、副詞‘더욱’に‘이’類が結合して新たな意味機能をもつに至ったものもある。
- 26) 今回は言及できなかったが、筆者はこれを日本語古文でいうところの「はさみこみ」に似た機能ではないかと考えている。「はさみこみ」とは、例えば「いかで下りなむと思へど、さらにえふとも身じろかねば、いますこし奥にひき入りて、さすがにゆかしきなめり、御几帳のほころびよりはつかに見入れたり」(『枕草子』184段)における「さすがにゆかしきなめり」のような部分をいう。この点については今後の課題としたい。
- 27) 日本語の「きれいに」について仁田義雄(2002, 70)は、「彼は靴をきれいに磨いた」という例文を引いて次のように述べている。こ「の「キレイニ」は、磨いた結果、靴がきれいな状態であることを表していること、つまり、動きの結果の、主体の状態のありように言及していることによって、結果の副詞である。しかし、この「キレイニ」は、「丁寧ニ磨く」に類似する意味で解釈できなくもない、その程度、つまり、磨くという動きの遂行の仕方に言及していると解釈できる、その程度に応じて、様態の副詞的である」。これは「きれいに」を結果の副詞とみるか様態の副詞とみるかという文脈で語られた内容であるが、朝鮮語の‘이’類との関連で言えば、‘깨끗이’が結果よりむしろその遂行の仕方に焦点を当てた話者の評価にも用いられ得ることを示唆している。“영이가 집안을 깨끗이 청소했지만, 깨끗해지지 않았다.”(ヨンイは家の中をきれいに掃除したが、きれいにならなかった)のような文が成り立つのはそのためである。

引用・参考文献

- 구본관(1998), “15세기 국어 파생법에 대한 연구”, 국어학회.
- 김건희(2006), ‘형용사의 부사적 쓰임에 대하여 — ‘이’와 ‘-게’ 결합형을 중심으로—’, “형태론” 8-2, 313-337.
- 김형배(2004), ‘파생 부사의 원형밝히기와 접미사 ‘이, -히’의 표기 문제’, “한말연구” 15, 121-145.
- 박소영(2001), ‘결과 부사형 ‘-게’에 대한 연구’, “한글” 252, 한글학회, 45-77.
- 방형심(2008), ‘한국어 부사형어미 ‘-게’의 확장에 관한 통시적 고찰’, 한국문화연구 14, 273-297.
- 서정수(2005), “한국어의 부사”, 서울대학교출판부.
- 손남익(1995), “국어부사연구”, 박이정.

- 송철의(1992), “국어의 파생어형성 연구”, 태학사.
- 심재기(1982), “국어어휘론”, 집문당.
- 유혜원(2007), ‘-게’에 대한 형태론적 고찰’, “형태론” 9-1, 25-45.
- 이익섭(2003), “국어 부사절의 성립”, 태학사.
- 이현희(1994), “중세국어 구문연구”, 신구문화사.
- 임채훈(2007), ‘“형용사+게” 부사어의 문장 의미 구성’, “국어학” 49, 159-391.
- 임홍빈(1976), ‘부사화와 대상성’, “국어학” 4, 39-60.
- 장영준(2009), ‘한국어 두 가지 부사형 ‘-이’와 ‘-게’의 의미 차이와 분포양상’, “현대문법연구” 58, 89-111.
- 최현배(1928), “우리말본”, 정음사.
- 한주희(2014), ‘-이, -히, -게’형 부사어의 사건 수식 양상과 의미 해석의 중의성’, “한글” 305, 199-223.
- 中西恭子(2014)「語幹末きの音価について」 第64回朝鮮語教育学会発表要旨
- 仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』 ころしお出版